主題：障害者家族における母親へのソーシャルワークの方向性
－母親のアイデンティティの二側面を理解した支援－

○　関西国際大学 教育学部 教育福祉学科　　春木 裕美（8571）

キーワード：障害児、母親、ケア、アイデンティティ

１．研 究 目 的

これまでの障害児を育てる家族支援の研究や日本の施策は、ともに障害受容、養育支援の重要性を示してきた。その方向性を受けて、障害児の母親としてのケア役割の側面は、子どもの障害を受容する過程のなかで、子どもへのケアを通して、また、専門職の支援、ピアの母親達との交流、社会との関わりによって形成されてきた。

母親への過度なケアの役割期待は子どもとの心理的な母子一体化や共依存関係の危険性をもつこと（藤原 2006)、役割的拘束（中川 2003）の状態が生じる指摘がある。特に、重度障害をもつ子どもの母親は、一般的な子育ての時期が過ぎてもなお、自らの手で充分なケアを与え、子どもの社会参加を支え続けなければならない。

しかし、春日（1992：126）は「母親たちが 2 つの自己――期待される障害児の母親として生きねばならぬという自己と、母親役割を離れて自分の人生を生きたいという自己――の常時的葛藤にさらされている」と指摘する。本研究では、この 2 つの自己の後者を「独自性を志向する側面」と呼ぶこととする。従来の家族支援には、この独自性を志向する側面を尊重する支援の視点は重視されてこなかった。King（2004）は、人生の意義を感じるためには、社会的なつながり、意義のある活動、自己理解を伴う追求等、自ら望む人生のあらゆる側面に参加する機会が必要であると指摘している。家族介護者にとっては、ケア役割だけでなく複数の役割をもつこと、特に職業をもつ場合には自己喪失感が低く、肯定的な自己評価をもたらし、ケア活動に封じ込まれてしまう「ロール・エンガルフメン」を防ぐことが明らかにされている（Skaff & Pearlin 1992)。本研究は、母親のアイデンティティの二側面を整理し、障害児を育てる母親の独自性を志向する側面を支える方向性を示す。そして、障害児者の家族支援として、母親へのソーシャルワークの在り方を検討する。

２．研究の視点および方法

本研究は、文献を用いて、障害児を育てる母親のアイデンティティの二側面「障害児の母親としてのケア役割の側面」「独自性を志向する側面」を整理する。後者には King (2004) の指摘を用いる。そして、障害児を育てる母親の独自性を志向する側面を支える方向性を示す。考察として、ケア負担が偏る母親へのソーシャルワークの在り方を検討する。

３．倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理規定を尊守したものである。

４．研 究 結 果

母親のアイデンティティの二側面として、まず、障害児の母親としてのケア役割の側面

とは、①子どものために生きることをめざし、子どもと心理的に一体化するような感覚をもち、②子どもへのケア役割を最優先することである。ケアには、医療的ケアを含む専門的なケアから身辺のケア等を日常的に担うこと、子どもの発達を保障する療育に付き添うこと、通院等に付き添うこと、子どもの代弁者となり子どもの権利や自己決定を支えること、通学時の送迎や社会参加を支えること等を含む。ケアの範囲は広く、子どもが成長しても続くものである。この場合の母親の自己実現は、子どもと心理的に一体化している感覚があるため、子どもの自己実現が自らの自己実現となる。また、子どもへのケアを通して成長することも含む。

一方、独自性を志向する側面とは、①自分のために生きる人生であり、②本人が望む、意義のある活動に関わり続けることである。例えば、仕事、趣味、ボランティア等の活動に関わることを通して社会とのつながりをもつこと、社会に貢献することや社会から認められること、気分転換をすること、充実感を得ること等を志向する側面である。この側面の自己実現は母親ではない側面において、意義のある経験を基にして成長するものである。

障害児の母親のロール・エンガルフメントを防ぐには、社会が母親の独自性を志向する側面を尊重する視点をもつこと重要である。よって、障害児を育てる母親のアイデンティティの二側面において、均衡モデルと不均衡モデルを検討した。均衡モデルは、独自性を志向する側面と障害児の母親としてのケア役割の側面の希望と現状のバランスが取れているもので、これは、母親の精神的安定や充実した生活につながると捉えることができる。一方で、不均衡モデルでは、独自性を志向する側面をもっていたとしても、母親の希望と現状にズレが生じている場合には葛藤をもっていると捉えることができる。

５．考 察

障害児者と暮らす家族へのソーシャルワークには、障害児者の支援と併せて、特に、ケア負担が偏りやすい母親を当事者と捉えた支援が必要である。母親への支援には、ケア役割の側面だけでなく母親の独自性を志向する側面についても念頭におくことが重要である。就労を含む、母親が自身の人生に意義を感じる活動に参加できるように、ソーシャルワーカーは母親との対話を通して、母親の希望と現状のズレを確認し、ズレが生じる原因を明らかにし、母親の意向を基に支援することが必要である。

文献

藤原里佐(2006)『重度障害児家族の生活：ケアする母親とジェンダー』明石書店.

春日キスヨ(1992)「障害者問題からみた社会福祉」野々山久也編『家族福祉の視点：多様化するライフスタイルを生きる』ミネルヴァ書房, 101-130.

King, G. A. (2004). The Meaning of Life Experiences: Application of a Meta-Model to Rehabilitation Sciences and Services. American Journal of Orthopsychiatry, 74(1), 72–88.

中川　薫(2003)「重症心身障害児の母親の『母親意識』の形成と変容のプロセスに関する研究：社会的相互作用がもたらす影響に着目して」『保健医療社会学論集』14,(1), 1-12.

Skaff, M. M., and Pearlin, L. I.(1992) Caregiving: Role Engulfment and the Loss of Self. Gerontologist, 32(5), 656–664.

本研究はJSPS科研費22 K20192の助成を受けて行った。本発表に関連して開示すべき利益相反はない。